+博論書式 3(論博書式 3)

2023 年 1 月 13 日

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学	分　　野	言語聴覚
学籍番号	19S3068	院生氏名	佐藤　友貴
通学キャンパス	大田原キャンパス		
論　文　題　目	**人工内耳装用児の競合音声下の語音聴取能に 話者の声の違いと発話特徴が与える影響**		
審査結果（枠で囲む）	合格　　不合格		

＜審査結果の要旨＞

1. 主論文について

1) 研究の概要

先天性の重度難聴児でも、人工内耳(CI)装用によって語音の聴取能力が格段に改善することは広く知られているが、競合音声下での聴取は困難を極めるとの報告が多い。本研究の目的は、競合音声下の語音聴取時に話者の声の違いと発話速度の違いが与える影響を明らかにすることである。対象 は 7－14 歳(平均 10.8 歳)の学童 CI 児 16 名で、対照群は同年齢の聴児 18 名であった。研究Ⅰでは、声の高さに関与する基本周波数(F0)と、声質に関与するフォルマント周波数を操作した声の異同弁別課題を実施し、弁別閾値は F0 で 1.0 semitone(st)、フォルマント周波数で 1.6st、両者を組み合わせると条件下限(0.5st)まで弁別可能であり、CI 装用児でも、声の高さや質のわずかな違いに気付ける可能性を明らかにした。研究Ⅱでは話し手の声と発話速度を変化させた競合音声下の聴取課題を実施した結果、ターゲット音声と競合音声の違いが大きくなるに従って有意に正答率が向上し、CI 児は話者の声の違いや発話特徴を、競合音声下の語音聴取の手掛かりとして用いていることが示唆された。

2) 研究方法

研究は本学倫理審査委員会の承認を得て実施され、方法も適切であった。

3) 知見の新規性と価値

競合音声や雑音が多い学校環境において、必要な情報を適切かつ瞬時に聞き取らなければならないのは、聴覚障害児にとっては酷な状況である。本研究は、CI 児が何を手掛かりにして競合音声下でターゲット音を聴取するかについて、話者の声や発話特徴に着目し明らかにした点で新規性があり、研究結果は言語聴覚士の臨床のみならず、学校教員に適切なアドバイスができ、教育的観点からも価値が高いと評価できる。

2. 審査経過について

審査会は 2022 年 12 月 13 日に実施し、副論文が本学の必要条件を満たしていることを確認した後に主論文について質疑応答を行った。主論文の用語の使用や研究の限界について追記・修正を求め、指摘事項が適切に修正されていることを審査員全員で確認した。

3. 口頭試問の結果

研究内容に関する質問に対して適切に応答し、今後の研究の方向性や臨床応用についても明確な報告がなされ、この分野の専門的知識を十分に得ていることが確認できた。

以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が著者に博士(言語聴覚学)の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。

論文審査担当者	主　査　城間 将江 副　査　平島ユイ子 副　査　藤本　幹